

南講武草田遺跡出土土器に描かれた 「龍」の出現背景の検討

白石哲也・小澤麻帆・西村 葵

1. はじめに

原始絵画の研究は、類例を集成し、図像の意味を検討することが一般的である（橋本1996・2020、春成1991など）。この研究手法は、考古学的研究において最も基本的なアプローチであり、絵画の意味を読み解く上で有効な研究手法のひとつである。実際、これら先行研究の成果により、日本列島における原始絵画は体系的な整理がなされてきた。しかし、原始絵画が描かれる考古資料は日常生活で用いられる土器や石器などに比べ、圧倒的に出土量が少なく、研究の進展が遅い分野のひとつと言える。だが、そこに描かれる絵画には、当時の人々の思想や習俗が反映されると考えられることから、その解明は先史・古代の社会や文化を復元していく上で重要な課題である。そのため、これまでの先行研究を踏まえつつ、既存資料に対する新たなアプローチなども検討していく必要がある。例えば、安藤広道氏によって行われている図像の構造分析などはそうした試みの一例であろう（安藤2006）。

同様に出土した原始絵画について遺跡・遺構の関連性を検討し、その図像が描かれた背景を明らかにしていくことも大切である。遺跡内での位置づけを明確にすることで、その図像が成立した背景を読み解き、そこから意味を解明していく方法である。今回、筆者らは島根県南講武草田遺跡から出土した絵画土器を対象として、その絵画土器が成立した背景を遺跡から位置づけていくことを目指す。

南講武草田遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡と考えられ、近畿系土器が大量に出土しており、特殊性の高い遺跡と評価される。そして、出土した絵画土器も山陰地域では珍しい「龍」と目される図像を持つ。本稿では、南講武草田遺跡の特殊性を紐解きつつ、「龍」の図像を持つ絵画土器が出現した背景を明らかにする。

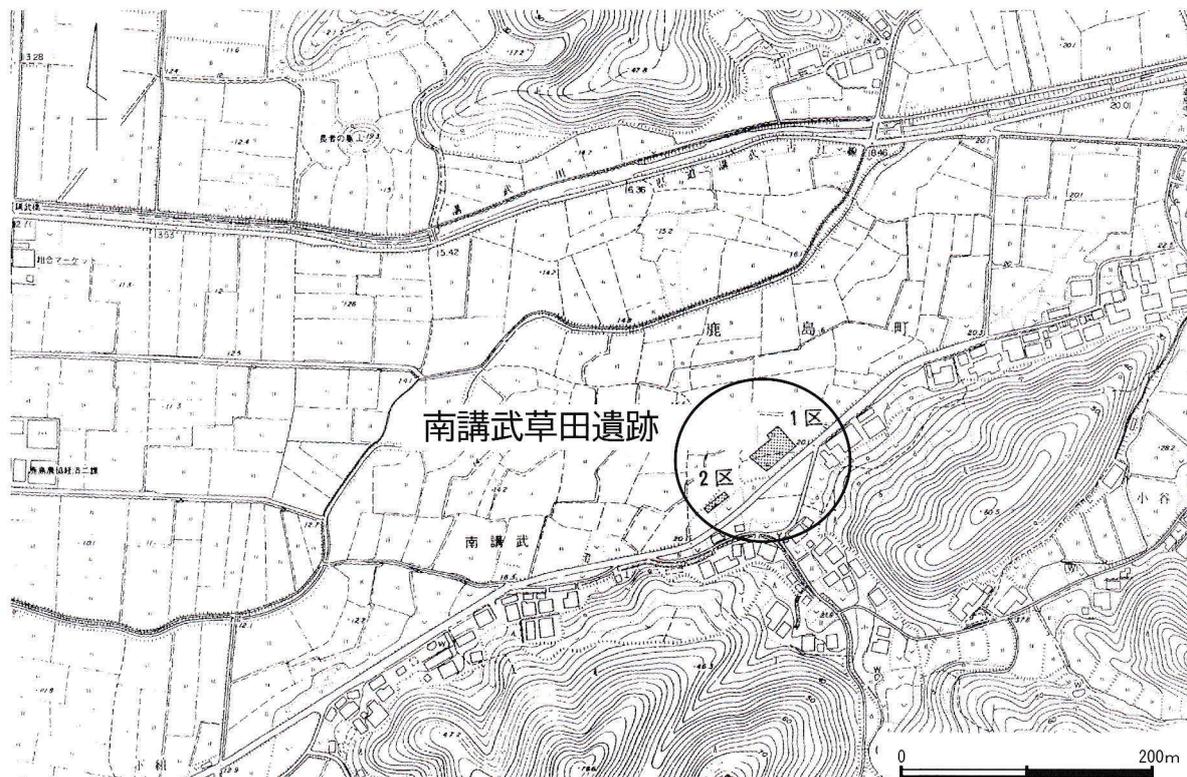


図1 南講武草田遺跡（鹿島町教育委員会1992を一部改変）

2. 南講武草田遺跡の立地と絵画土器出土地点の概要

まずは、南講武草田遺跡の立地と概要について、発掘調査報告書の記載に基づき、確認していきたい。

本遺跡は、鳥根県松江市（旧八束郡）鹿島町大字南講武に所在し、鳥根半島の中ほどに位置する講武盆地にある。遺跡は、盆地中央南側の扇状地のやや高台に位置する（図1）。講武盆地は、講武川によって形成された広い沖積地を耕作地とした水田域を有しており、弥生時代も安定的に集落が増加し、日本海に面した交易拠点として外来系土器などが出土する地域とされる（真木2024）。そのはじめは、突帯文土器と遠賀川系土器が共伴する北講武氏元遺跡（鹿島町教育委員会1989）の段階まで遡る。その後、弥生時代前期中葉になると講武盆地の南西端に突帯文土器を払拭した佐太前遺跡やその周辺では、佐太講武貝塚低湿地部（鹿島町教育委員会1987）、稗田遺跡（鹿島町教育委員会1994）が成立する。これらの弥生遺跡の形成の背景には、縄文時代後期以降の海退や河川沖積作用によって形成された低湿地を利用した水稻耕作が発達したことが想定される（会下・高安2020）。特に、佐太前遺跡は当該地域の拠点集落として弥生時代を通じて、集落が拡大展開されていく。後期になると盆地南側に、南講武草田遺跡が成立する。

この南講武草田遺跡の調査は、赤澤秀則氏が担当され、昭和63年11月9日から平成元年3月17日まで行われた。調査区は、第一調査区（30m×12m）と第二調査区（20m×5m）が設定され、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺構・遺物が確認されている。

第一調査区（図2）では、SD02、03の検出過程で、水路西側に近畿系土器が多量に出土した土器溜り（H-5区）を検出している。また、別の地点でもH-5区ほどではないが、近畿系土器を含む土器溜りを確認している。これらは、その下に木棺墓（SX01、03）が検出され、それに伴うものであると報告される。しかし、赤澤氏によると現在は布彫り建物跡の可能性を想定している（註1）。他にもSD02では吉備系の小形



図2 南講武草田遺跡第一調査区遺構図（鹿島町教育委員会1992）

壺形土器やCD-4区土器溜りから朝鮮半島製と考えられる瓦質土器が出土している。これらの様相から南講武草田遺跡は、近畿系の人々を中心に、各地から人々の往来の多い集落であったことが考えられる。なお、第二調査区は3か所のテストピットから第一調査区と同様の遺物包含層が確認されている。

今回対象とした絵画土器は、第一調査区G-6区から出土している。出土位置からSD-03までは掘り下げていないものの、SD-03上面にあり、H-5区土器溜りと同様に関連する資料と考えられる。SD-03は、SD-02の下層から検出されており、幅4~5m、深さ約1mの非常にしっかりしたもので、計画的に掘られたものとされる。溝は、下流になるにつれ水路は太くなり、扇状地のほぼ中央を貫いて掘られていることから、扇状地奥から水を排水するためのものと考えられる。溝自体の埋没時期は、古墳時代前期草田7期とされるが、弥生時代後期の遺物も多量に含まれることから、弥生時代後期から古墳時代前期まで利用されたことが想定される。また、隣接するSD02付近では、吉備系土器が出土しており、本遺跡の交流範囲の広さを物語る。(白石)

3. 南講武草田遺跡の在り土器の概要

次に、外来系土器の理解のため、在り土器の様相について概観しておきたい。南講武草田遺跡では、弥生時代後期の全時期を通して土器が出土しており、それらをもとに赤澤氏によって出土土器の編年が組まれている(赤澤1992)。そこで、以下では、赤澤氏の編年に基づき、説明を進めていく。なお、本稿では壺形土器及び甕形土器を中心に検討を行っており、ここでもそれら2つの器種に限定して論じる。

草田1期

弥生時代後期前葉のもので、H-2・3区土器溜りが標識資料である。壺形土器、甕形土器の口縁が上方に引き上げられ、外面には凹線文を数条施文しており、内面は頸部直下までヘラケズリが見られる。プロポジションは中期末の系譜を引き継いでいる。

草田2期

H-2・3区土器溜りから出土しており、弥生時代後期中葉に該当する。壺形土器、甕形土器の複合口縁が更に上方に引き伸ばされ、外面にはヘラによる擬凹線を施文し、多条化する。

草田3期

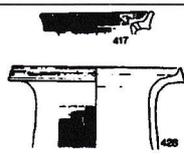
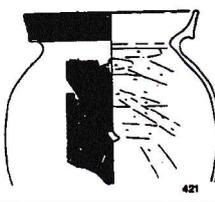
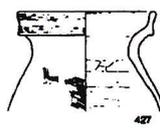
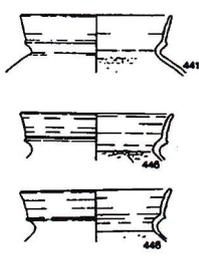
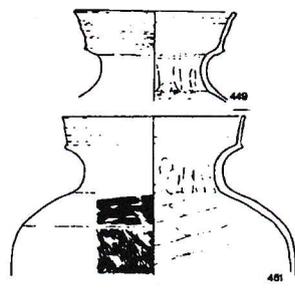
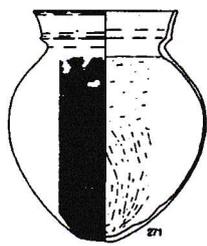
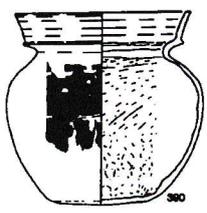
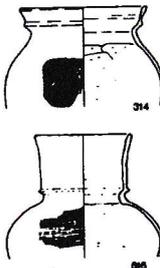
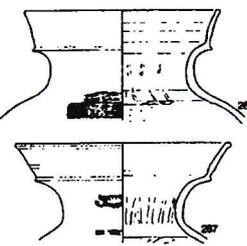
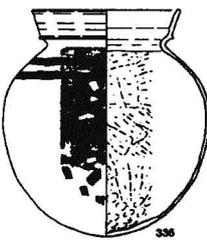
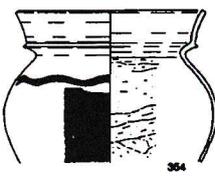
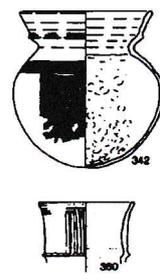
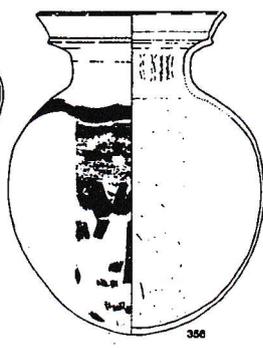
壺形土器、甕形土器の複合口縁が更に上方に延伸し、外面の平行線文は、二枚貝の貝殻腹縁と考えられるクシ状の工具により施文される。そのため、口縁部形態は、貝殻腹縁に沿ってカーブを描く。H-2・3区土器溜り、SX08から出土している。また、吉備地域からの搬入土器はこの時期に相当するものが多い。

草田4期

壺形土器や甕形土器の複合口縁外面に施文されていた平行線文は消え、口縁はやや厚手になり、端部に向かって細くなる。3期同様口縁部成形に貝殻腹縁を用いたものも含まれ、成形後に痕跡をナデ消した個体も存在する。肩部の施文は貝殻腹縁を用いている。

草田5期

H-5区土器溜りを標識とする。壺・甕形土器の複合口縁外面は無文化し、口縁断面は薄く引き出した形態を呈する。稜は水平方向に突出している。成形に貝殻腹縁を用いることはなくなり、施文のために僅かに使用されるのみとなる。また、口縁内部のヘラミガキも行われぬ。この時期に、近畿系土器が含まれるようになる。第3章で取り上げる、「龍」が描かれた壺も同時期に位置づけられる。

	甕	平底甕 (小形甕)	中形甕 (直口壺)	壺
草田1期				
草田2期				
草田3期				
草田4期				
草田5期				
草田6期				
草田7期				

0 (1:8) 20cm

図3 南講武草田遺跡の土器編年 (鹿島町教育委員会1992に一部加筆)

草田6期

CD-4区、DE-3区土器溜りが標識である。甕形土器の複合口縁は厚みを増し、端部を外側に折り曲げることを特徴とする。体部は倒卵形で、僅かに平底を留めるか、尖り底である。底部内面には指圧痕が見られ、丸底化へ向かいつつある。壺形土器は口縁が外傾を始める。また、この時期から複合口縁の直口壺が組成に入るようになる。草田5期同様、近畿系の壺形土器や加飾壺、甕形土器、小型丸底鉢、高杯が含まれる他、瓦質土器も出土している。

草田7期

F-3区土器溜り資料を標識とする。甕形土器の口縁部は更に厚みを増しており、端部が折れ曲がるものも作られるが、平坦面を作り出す一群の比率が高い。複合口縁部の稜は水平方向に突出するものの、鋭意さを欠いているものも含まれる。体部は球形化が進み、底部は完全な丸底となる。肩部の文様は列点文や波状文が施されるが、それらもほとんど省略されており、横ハケで代用するものの割合が増える。搬入土器には、布留系甕や小型丸底壺、小型丸底鉢などの近畿系土器がある。(西村)

4. 講武草田遺跡出土の外来系土器について

南講武草田遺跡出土土器の特徴として、外来系土器が一定数含まれることが挙げられる。出雲地域の遺跡では、本遺跡以外でも外来系土器の流入が認められ、出雲平野に位置する山持遺跡もその1つである(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター編2005)。しかし、山持遺跡では北部九州や西部瀬戸内、吉備などが高い比率で含まれるが、南講武草田遺跡では出土する外来系土器のほとんどが近畿系(註2)と考えられており(池淵2022)、遺跡の立地によって関係の深い地域が異なると考えられている。本章では、南講武草田遺跡出土の外来系土器を対象として、これまで近畿系とされてきた土器群の位置付けを行う。

(1) 草田5期の様相

まず草田5期に該当する外来系土器群の特徴について概要を示す。当該期の基準資料として、H-5区土器溜り出土資料が挙げられる。この土器溜りは、外来系と考えられる土器が主体となり、そこに在地の土器が混ざるといった特徴をもつ。外来系とされる土器群の器種構成は、壺形土器、甕形土器、高杯、器台であり、その比率は甕形土器が最も多い(図4)。

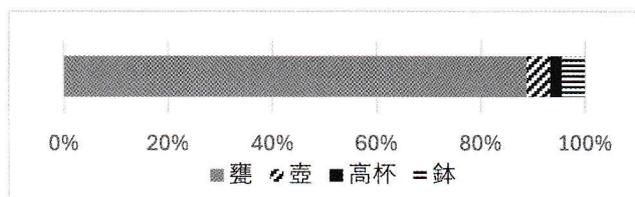


図4 H-5区土器溜り出土外来系土器の器種構成

また、出土した甕形土器はその多くが口径20cm以下の小型甕であり、表面にススが付着する個体や被熱を受けた個体が大半を占めており、繰り返し使用されたことがわかる。出土した土器は完形となるものが少ないが、確認できた底部片はすべて平底である。

次に甕形土器の形態、製作技術及び色調・胎土について見ていく。外面・内面の調整、口縁部形態はそれぞれ分類を行った。

外面調整(図5) G1~G3類に分類した。G1類はタタキ成形のもので、G2類はハケ調整を行うもの、G3類はその他を一括した。分類の比率については図5に示した。G1類が80%弱を占めており、続いてG2類が多い。

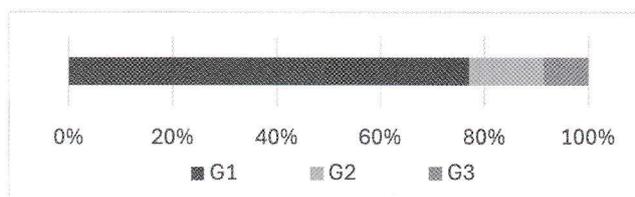


図5 外面調整の分類比率

内面調整（図6） N1～N3類に分類を行った。N1類はヘラケズリを行うもの、N2類はハケ調整を行うもの、N3類はその他を一括した。分類の比率は図6に示した。N2類が最も多い。

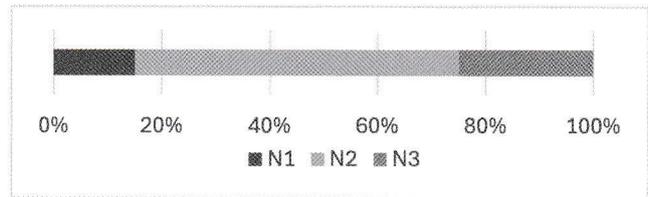


図6 内面調整の分類比率

口縁部形態（図7） 地域差を残す要素として口縁部形態は注目すべき一要素である。本稿ではK1を「く」の字口縁、K2を複合口縁（註3）のものとして分類した。分類の比率は図4に示した。H-5区土器溜まりで出土した土器群の大半がK1類に該当する。

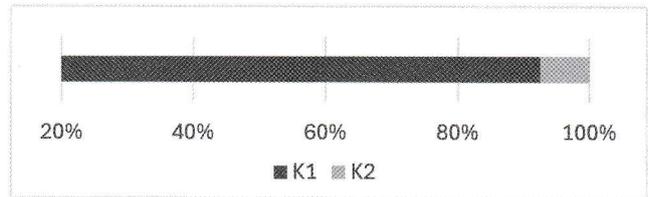


図7 口縁部形態の分類比率

色調・胎土 色調・胎土については、大別4種に区別することが可能である。1つは淡黄色系を呈し、茶褐色や灰色粒子を多く含む一群である。これは少数であるが、在地土器の色調・胎土と明確に区別できる。もう1つは赤褐色～橙色系の色調をもつ一群である。これも在地の土器とは異なり、長石や黒色粒子などやや大きめの粒子を多く含んでいる。また、色調は暗褐色や灰褐色系であるが、在地土器のような細粒砂でなく、やや大きめの粒子を含む胎土をもつ1群も確認できる。そして在地土器に使用される暗褐色や灰褐色系を呈し、細かい砂粒の胎土をもつ一群がある。

以上の調整と口縁部形態を踏まえて、外来系土器の分類を行った（図8）。本来であればこれらを踏まえて対象とする土器群の型式設定を行うべきであるが、今回は対象点数が限られ量的担保ができないため、外面調整と口縁部形態のみに注目し、内面調整や口縁端部、プロポーシオン、色調・胎土については言及に止めることとする。

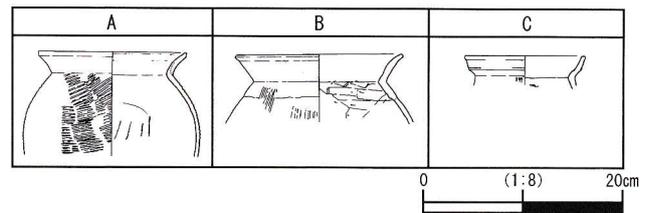


図8 外来系土器の分類

A類は外面タタキ成形で「く」の字口縁を有するものである。この中にはタタキ成形の後、ハケ調整を施すものも含まれており、本来区別できるが、一括とした。B類は外面ハケ調整で「く」の字口縁を有するものである。C類は外面ハケ調整を施し、有段口縁を有するものである。分析結果から明らかのように、H-5区出土の外来系土器の多くはA類に該当し（図9）、A類の中でも多くは内面ハケ調整を施すようである（図10）。また、分類までは至らないが、全体の特徴として、口縁部の長短や口頸部の縮まり具合にバリエーションが存在することを指摘しておく。

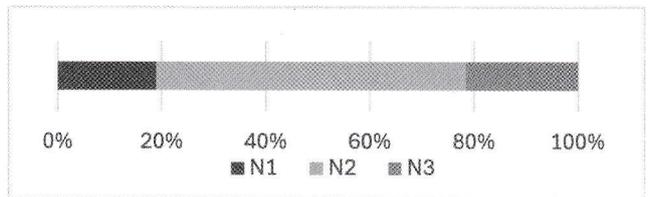


図9 外来系土器の分類比率

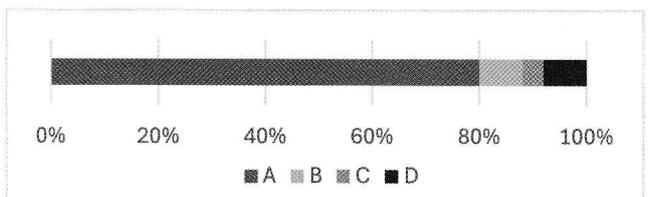


図10 A類の内面調整比率

(2) 草田6期の外来系土器

続いて、草田6期の外来系土器について述べる。前段階より出土数が少なく単純に比較することは困難であるが、概要を示す。出土している器種は壺形土器、甕形土器、高杯、鉢であり、甕形土器が最も多い。また、甕についても基本的に口径15cm程度と5期と同じく小型である。調整は、外面にタタキを施す個体がほとんどである。また口縁部形態は全て「く」の字で、本稿A類に該当する。

(3) 周辺地域の様相 (図11)

次に南講武草田遺跡出土の外来系土器を検討する上で、当該期の周辺地域の土器様相を明らかにする必要がある。ここでは、草田編年5期併行の各地域の土器様相を甕形土器に焦点を当てて概観する。なお、詳細については先行研究を参考にした。参考とした文献は地域ごとに示している。

a 丹後 (高野2006・2007、桐井2020)

弥生時代後期以降、擬凹線文で装飾された土器の様式圏の中心となる丹後では、西谷3式から浅後谷南1式に併行する時期である。擬凹線土器様式の最終段階にあたる西谷3式は、義凹線文の多条化や口縁部の拡張傾向など北陸系土器の影響が大きい。続く浅後谷南1式は、畿内系小型祭式土器の出現を画期とする様式であり、外来系土器の影響を強く受け、複合口縁の擬凹線が消失し、ナデ仕上げを施すようになっていく (高野2006)。また畿内の要素は地理的要因から、加古川・由良川を經由して入ると考えられるが、V様式系タタキ甕の流入は極めて少なく後述する北丹波や但馬とは様相を異にする (高野2007)。むしろ当地域では、浅後谷南式には北陸系の影響とみられる「く」の字口縁の甕形土器が組成を成しており、やはり北陸方面からの影響が強いとみられる (桐井2020)。

b・c 丹波 (多賀2000、近澤2000、高野2007・2009)

丹波は北丹波と西丹波、南丹波とで異なる様相を示す。亀岡市などを中心とする南丹波では丹後系土器が主体とならず、畿内南部からの影響を強く受ける (高野2009)。一方で、由良川中流域から下流域にかけての北丹波と加古川上流域の西丹波では、時期により他地域からの影響に強弱がある (多賀2000、高野2007)。弥生時代後期末から庄内併行期前半にかけては、前段階から丹後系土器の影響下にありつつも、近畿南部の土器が増加し、在地の有段口縁甕がタタキ成形されるなど折衷的な様相を示す。加えてV様式系統のタタキ甕が高比率で出土した小西町田遺跡など受容の拠点となるような集落も存在する (近澤2000、高野2007・2009)。加古川・由良川を介し、播磨や摂津といった地域からの近畿南部の土器の流入が想定される。

d 但馬 (谷本2001、高野2007)

基本的には、丹後の影響を強く受けたような複合口縁をもつものが主流である。一方で、庄内併行期前半には、播磨や摂津の影響を受けた細頸壺や器台、タタキ甕が存在しており、加古川を介したルートでの人々の移動が想定されている (高野2007)。但馬の庄内2期に相当する豊岡市立石墳墓群103号地点ではV様式系統のタタキ甕を含む近畿南部の土器が多く出土するなど、他地域との交流を示す一例として挙げられる (谷本2001)。

e 若狭・越前 (青木1994、坪田2000、安中・中江2024)

丹後と近江の境界に位置する若狭では、丹後系の影響を強く受けた在地土器が存在する。その他の地域からの影響も見受けられ、なかでも近接する近江と北陸からの影響が目立つようである。越前は小地域差が存在するものの、基本的には北陸系の影響下にあると考えられる (坪田2000)。また越前においては「く」

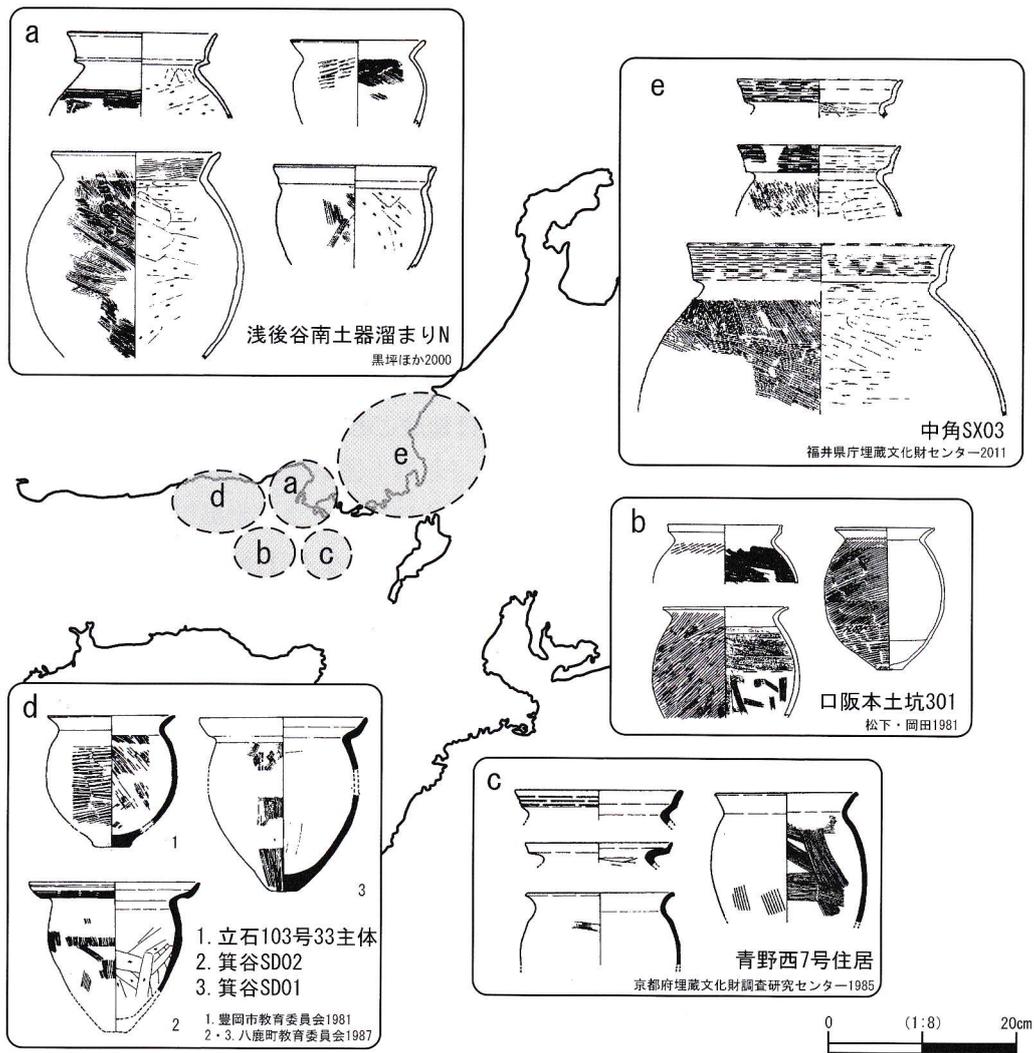


図11 周辺地域の土器様相（小澤作成・実測図は各報告書より引用）

の字甕が存在し、丹後同様に北陸北東部からの影響で徐々に在地土器へ影響を与えていることも注目しておく必要がある（青木1994、安中・中江2024）。

（4）南講武草田遺跡出土外来系土器の位置付け

本節では南講武草田遺跡出土の外来系土器の出自についての一案を提示したい。

まず、外来系土器が多数出土したH-5区土器溜まり出土土器は個体ごとに特徴はあるものの、口径20cm以下の甕形土器が大半を占める。土器の移動現象を考える際、移動している器種は重要であり、都出比呂志の研究（都出1983）を参考にすると、貯蔵具に加え、煮沸具も搬出される状況は移動類型のB類にあたり、移動した土地での生活が想定されている。今回対象としたH-5区出土土器は、口径20cm以下の甕形土器で、多くの個体はススが多量に付着している。また、壺形土器や鉢のような器種も存在するものの少量であることから、他地域からの移住ではなく、一時的な滞在、そして移動時に繰り返し使用した状況を示すと想定される。

では、この土器はどこから持ち込まれたのであろうか。出土している甕形土器に注目すると、個体差はあるものの、口縁部が「く」の字状を呈し、外面はタタキ調整（本稿A類）が大半を占める。山陰で当該期に製作される土器は複合口縁をもつものであり、胎土・色調についても在地の茶褐色系の細かい砂粒を含むものは殆ど含まれないため、在地土器の可能性は極めて低い。周辺地域においても、若狭や越前、丹

後では、複合口縁を呈するものが在地製作されている。一方で、但馬や北丹波・西丹波では、上述した通り当該期に近畿南部の土器の流入が顕著になる。この近畿南部の土器は、加古川・由良川を介した播磨や摂津といった地域すなわち畿内周縁地域の影響を受けたものであり、単純な外来要素の流入のみならず、在地の土器と融合し折衷的な土器を生み出す。特に北丹波でみられるタタキ甕は、外面に粗いタタキ、内面ハケ調整で、器壁も厚いという特徴があり（近澤2000）、本稿のA類と類似した特徴をもつ。また、口縁部形態や口頸部の締まり具合も個体差が大きいようで、丹波でみられる肥厚した口縁端部をもつ個体も1例ではあるものの、H-5区土器溜まりで出土している。

外面ハケ調整をもつB・C類についてだが、口縁部形態が複合口縁のC類については、直接的とは明言できないが丹後系土器と想定できるだろう。一方、「く」の字口縁をもち外面ハケ調整を施すB類は、南丹波の在地甕と特徴が一致する。しかし内外面ハケ調整で「く」の字口縁をもつ「能登甕」や「千種甕」などと呼ばれる一群が北陸北東部に存在し（滝沢2005など）、丹後や越前に流入もしくは影響を与えている可能性が指摘されている（青木1994、高野2007、桐井2020）。直接的ではなくとも北陸北東部からの影響も想定する必要があるだろう。

また南講武草田遺跡出土の外来系土器は、使用されている胎土が大別4種に識別することが可能であることも指摘した。なかには器形・製作技法は外来系と判断できるが、色調・胎土は在地土器のものと同様に類似する個体も含まれていた。いずれにせよ、胎土にバリエーションがある点は、複数地域からのモノと人の移動が想定されることを裏付ける一視点と言える。

その他、今回の分析ではプロポーシオンについてまで言及することができなかった。調整技法上同一であっても、口頸部の屈曲具合や胴部最大径の位置など含めた検討が必要であると思われる。

やや煩雑な議論となったが、加古川・由良川を介した交流、そして丹後、北陸と繋がる相互の地域間交流の中で、北丹波や但馬といった比較的早くにタタキ甕を受容した地域が中心となり、南講武草田遺跡出土の外来系土器に関係している可能性をここでは示しておく。（小澤）

5. 南講武草田遺跡出土の「龍」の絵画土器

（1）山陰地方の絵画土器

南講武草田遺跡出土土器の分析に入る前に、山陰地方の絵画土器について、概観しておきたい。

これまで山陰地方の絵画土器については、山田康弘氏（2006）や橋本裕行氏（2020）による集成及び検討が行われてきた。山田氏の分析によると、山陰地方の絵画土器は、Ⅱ期に出現し、Ⅳ期に最も増加することが明らかにされており、そのモチーフは基本的に近畿地方と共通するものが多く、それらを改変もしくは置換しているとされる。同じく、豊岡卓之氏もまた稲吉角田遺跡出土土器の絵画が、奈良県清水風遺跡の絵画のダイジェスト版と捉えており（豊岡2003）、山陰地方の絵画土器が、近畿地方と強い繋がりを持っていることがわかる。最近では、東森晋氏が山田氏の検討や橋本氏の資料集成の結果を踏まえ、新資料を加えた33遺跡87点（所在不明を含む）の集成に基づき、山陰地方における原始絵画の分析を行っている（東森2023）。東森氏は、山陰地方における絵画土器の分布について大きく6つの地域に分け、その中心は出雲西部と伯耆西部、そして遺跡数は少ないが3遺跡34資料が確認されている因幡とする。そして、弥生時代中期後葉に伯耆西部の大山山麓で近畿地方と共通する祭祀を認め、それが出雲南部地域と繋がる可能性を指摘する。また、古墳時代になると鳥取県では絵画や記号が近畿地方と共通するものの、出雲地域では認められないなど、周辺地域との文化的差異について言及する。

また山陰で描かれる絵画の図像の特色として、主にシカ・イノシシ・トリ・サカナ（サメ含む）の4種が挙げられ、なかでもサカナが多く描かれる点が、山陰地方の特徴とされてきた（山田2006、橋本2020、東森2023）。山陰地方のサカナとして描かれる図像は、その描き方からサメが多く、これは鳥取県青谷上寺地遺跡に代表され、他に白枝荒神遺跡や青木遺跡でも類似の図像が確認できる。近畿地方のサカナの図

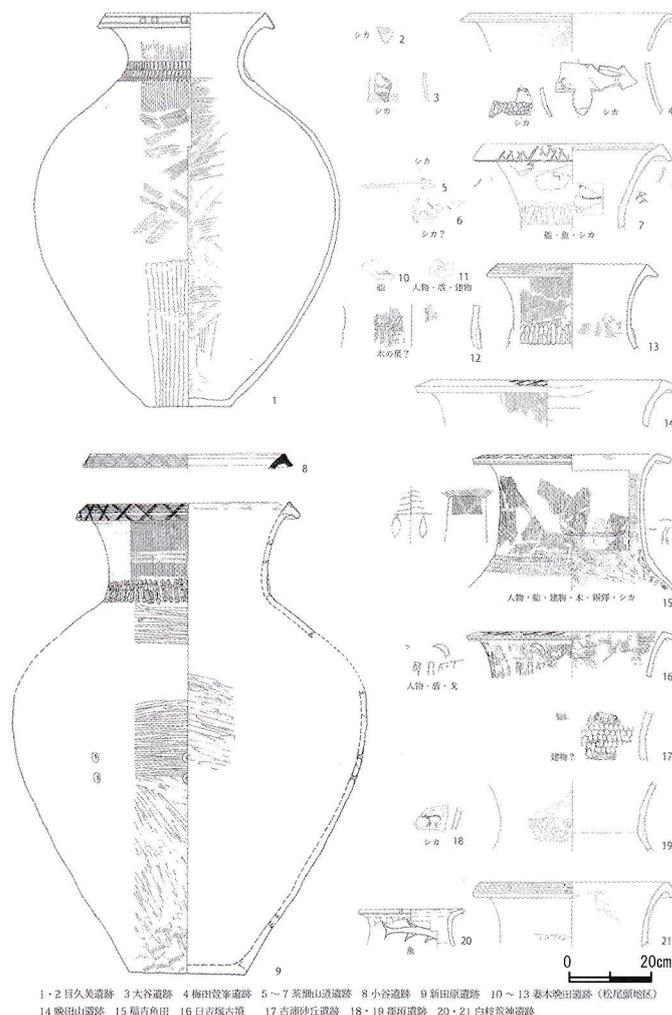
像が淡水魚とされるのに対して、サメが描かれることから、在地での置換（山田2006）の例と考えられる。ただし、鳥取県梶尾山古墳や鷲山古墳において描かれるサカナの絵画はサケ科が想定されており、サメを中心とする弥生時代とは異なる図像が描かれるようである。同様に、山陰地方の弥生時代から古墳時代への原始絵画の変化は連続的ではないことが指摘されている（東森2023）。

なお、絵画が描かれるキャンバスは、土器・青銅器（銅鐸・銅戈・銅剣）・木製品・石製品など多様であり、特に青谷上寺地遺跡では10点の木製品が選択されている。また描かれる土器は、ほぼ壺形土器に限定され、在地の土器に描かれていることが多い（図12）。ただし、土器のサイズは大型と中型に分かれ、大型については壺棺などが示唆されている（東森2023）。

これらの先行研究から、山陰地方における原始絵画の特徴は、①図像や帰属時期の点で近畿地方との繋がりが強く、②サカナ（特に、サメ）が多い点に特徴があり、③描かれるキャンバスは多様であるものの、土器では壺形土器に集中する点を挙げることができる。次に、これらを踏まえ、南講武草田遺跡から出土した絵画土器の位置づけを検討していきたい。

（2）南講武草田遺跡出土の絵画土器の特徴

南講武草田遺跡G-6区から単独で出土した絵画を持つ個体は、高さ約35cm、最大径約27cmの中型広口壺形土器で、一部欠損しているが、ほぼ完形で出土している（図13）。口縁部は、やや斜め上方に直線的に立ち上がる。胴部はやや縦長の球形で、体部上端部の絵画以外の装飾を持たない無文の個体である。



1・2 目久美遺跡 3 大谷遺跡 4 梅田堂家遺跡 5～7 茶畑山遺跡 8 小谷遺跡 9 新田原遺跡 10～13 妻木晩田遺跡（松尾頭地区）
14 晩田山遺跡 15 福吉角田 16 白吉塚古墳 17 古浦砂丘遺跡 18・19 都知遺跡 20・21 白枝荒神遺跡

図12 山陰地方における在地の絵画土器（東森2023）

口縁部内外面、体部上半は粗いハケで調整し、体部下半はヘラミガキで整えている。個体が復元された現在では確認できないが、報告書では粘土紐を積み上げた痕跡に対応するように内面にヘラケズリ痕が確認される。底部は平底である。

胴部上端に描かれた絵画は、約6 cm×6 cmを画面として、土器外面の調整後に上下に二本の線状で描かれる。上部は、口縁部の付け根付近から胴部にかけて2条の直線文が描かれ、下部では左から右にかけて1/4の円を描きつつ、そこから短い直線を引き、最後に下に折る。両者を組み合わせて、ひとつのモチーフとみるべきだろう。また、工具は屈曲部に二条の薄い線が見えることから、棒ではなく、2条の櫛またはヘラ状工具の角を用いて描かれたものと思われる。上下の順序は不明である。また、土器背面には大きな黒斑があり、絵画はその反対の黒斑が無い部分にあることから、画面を意識して焼成していることがわかる。他には胴下部に明瞭なススが確認でき、おそらく全周する可能性が高く、底部付近にはススが無いため、立位のまま火処に置かれた可能性がある。なお、この個体は、胎土や色調、器形等の特徴から在地土器ではなく、近畿系土器と考えられる。

(3) 南講武草田遺跡出土絵画土器の図像

ここで、南講武草田遺跡から出土した絵画土器に描かれた図像について考えたい。今回、対象とした南講武草田遺跡が所在する出雲東部では、「邪視文」もしくは「辟邪文」と呼ばれる人面を表現した文様で著名な伝出雲銅鐸（福田型銅鐸）が出土しているが、他には古浦砂丘遺跡出土の壺形土器（中期後葉）や西川津遺跡出土の壺形土器（後期）にS字状や山形文が描かれている程度であり、他の山陰地域に比べ、出土量はそう多くない。そうしたなかで、この図像を位置づけることは、弥生時代の講武盆地や周辺との関係を考える上で重要である。

さて、南講武草田遺跡出土土器に描かれた図像（図13）は、その形状から近畿地方や岡山県で後期に盛行する「龍」が想定されている。弥生時代の「龍」の図像は、全国的に絵画が記号化する後期に出現しており、やや特異な図像である。その特徴は、S字形もしくは逆S字形の胴・尾と三角形の鱗状の突起となっている。なお、龍の図像は、桜馬場遺跡などから出土した中国鏡などに描かれる龍を模した可能性もあるが、中国鏡は一視点画であり、絵画土器の龍は多視点画である点（佐原1980）や、龍の向きとして中国鏡は右向きであるが絵画土器は左向きなど異なる点も多く、龍に対するイメージに違いがあると指摘される（春成2000）。この指摘は、龍の絵画を考える上で非常に重要である。

ここで、まず南講武草田遺跡の図像が本当に「龍」と判断して良いのかを考えたい。図14（岩本2002）は、岩本貴氏が集成した各地域の龍の絵画である。一見してわかるように、龍の絵画はシカやイノシシ、トリに比べ、非常に抽象度が高い図像である。その理由は、龍が実在する動物ではなく、かつ中国においても想像上の動物であることから、日本列島における弥生時代の人々が龍を見ることが難しく、各地に伝わる過程で抽象度が高くなってしまふことが考えられる。実際、シカやトリ、サカナが種の同定まではできないものの、ある程度判別可能であることに比べ、龍を判別することはとても難しい。おそらく近畿の一部の人々は、龍の図像を実際に観ていたのであろうが、その後の各地に伝播していく過程で、簡略化や退化していったであろうことは容易に想定される。一方で、龍が描かれる土器は、ある一定の規範も見出されている。以下に、岩本氏の分類を参照する。

岩本1類

頭部または、これを意識した表現が認められるものである。すでに簡略化が進んだものがあり、その後の型式変化の胎動をみることができる。船橋（1）、池上（2）、天瀬（3）、唐古・鍵（5）の各遺跡例が相当する。

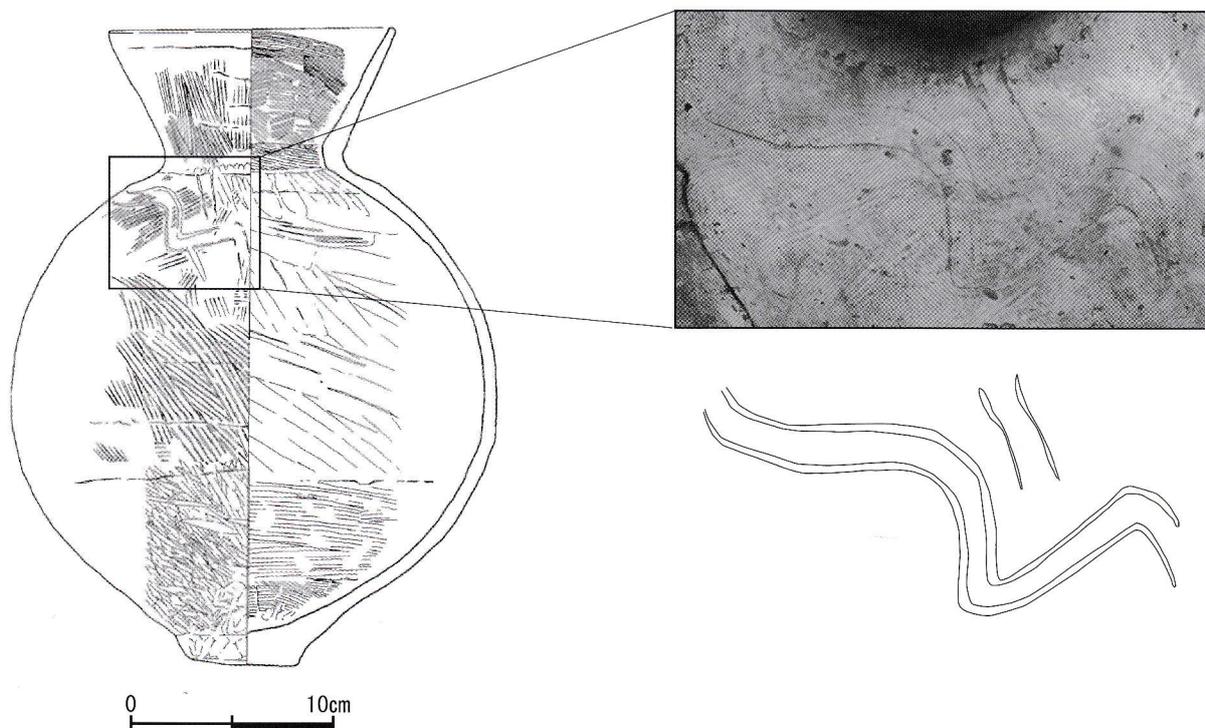


図13 南講武草田遺跡出土の絵画土器（鹿島町教育委員会1992より・写真・トレースは白石）

岩本2類

明確な頭部の表現を欠くもの。2類は、突起の発達が少ない胴部との区別が明瞭な2a類と、胴部の退化または、突起の長大化が進み、胴部と突起の大きさの区別が不明瞭な2b類に細分できる。いずれも1類を祖型として簡略化が進んだものと理解できよう。2aとして東奈良（8）、下池田（12）、2bとして恩智（4）、六大A（7）、天瀬（6・9）、鴨田（10）、角江（11）、高井（14）、の各遺跡例が該当する。なお、頭部形態が不明である東奈良（8）、下池田（12）遺跡例は便宜的に2a類に含めた。高井遺跡例（14）は、胴部、突起を縦位線で充填しているもので、唯一土製紡錘車に描かれた例である。

岩本3類

2類の胴部や突起の表現が線によって置き換えられたもの。2類の退化・抽象化と捉え、胴部の意識が明瞭な3a類と、胴部意識が薄れ、突起の長大化がみられる3b類に細分した。坪井（15）、西ノ辻（16）、船橋遺跡例（13）などが該当する。

岩本4類

その他を一括した。上ノ山（20）、下那珂（18）、上東（17・22）、原の辻（21）、池上（19・24）、唐古・鍵（23）、船橋（25）の各遺跡例などが該当する。

岩本氏の分類は、龍の図像を考える上で非常に有効な分類と捉えている。そこで、岩本氏の分類と前節での観察結果を踏まえると、南講武草田遺跡出土土器の図像は、頭部の表現を欠き、胴部が2条の線でS字形に描かれていることから、胴部が退化したものとなる。そして、縦線2条は突起の表現と考えられ、胴部との接続が不明瞭となっている。以上のことから、岩本分類2b類の範疇と考えられる。

岩本氏は、1～3類を型式学的な変化として捉えており、1類を最も古い時期に置く。そして、比較的明瞭に模倣しているのは1類から2a類とする。この1類から2a類の時期は、「龍」の図像が、近畿地方

に分布が限定される。一方、2b類は東海地方及び中国地方に分布が拡大することが確認されている。岩本氏は、その伝播過程として、恩智遺跡から六大A遺跡、角江遺跡への情報の変換・欠落が見て取れることを言及する（岩本2002）。これを中国・山陰地方に適応し、南講武草田遺跡出土土器の図像の起源を考えるのであれば、胴部のS字形を基本としていることから、大阪府船橋遺跡（1）や池上遺跡（2）の例が該当する。船橋遺跡例や池上遺跡例は、かなり精巧に描かれており、胴部はS字形を呈し、南講武草田遺跡はその退化・簡略化したものと考えられる。また、類似する事例として、同じく1類及び2a類に分類されている岡山県天瀬遺跡（6）の図像は、S字形の胴部を持ちながら、突起と考えられる形状が確認でき、南講武草田遺跡例に比べると、船橋遺跡や池上遺跡に近い。おそらく南講武草田遺跡例は、天瀬遺跡例から情報の欠落などが想定される資料と言える。

以上を踏まえると、図像の変遷過程として南講武草田遺跡出土の龍は、船橋遺跡や池上・曾根遺跡を祖型とし、天瀬遺跡からさらに簡略化が進んだ資料と位置づけることが妥当であろう。また、弥生時代の絵画は、後期前葉は長頸壺に描かれることが多いが、後期後葉になると広口壺の占める割合が高くなる（藤田1982）。龍の絵画も長頸壺と広口壺に多く、南講武草田遺跡では広口壺に描かれている点で、近畿地方の絵画土器の規範に含まれる。また、龍の絵画土器は、おもに井戸や溝、河道など水に関連する遺構から出土することが多く、本資料が出土したG-6区は直下に河道が通っている。このような諸条件を踏まえると、南講武草田遺跡出土土器に描かれた絵画は、「龍」と判断することが可能であり、近畿地方との強い関わりのなかで出現したのだろう。（白石）

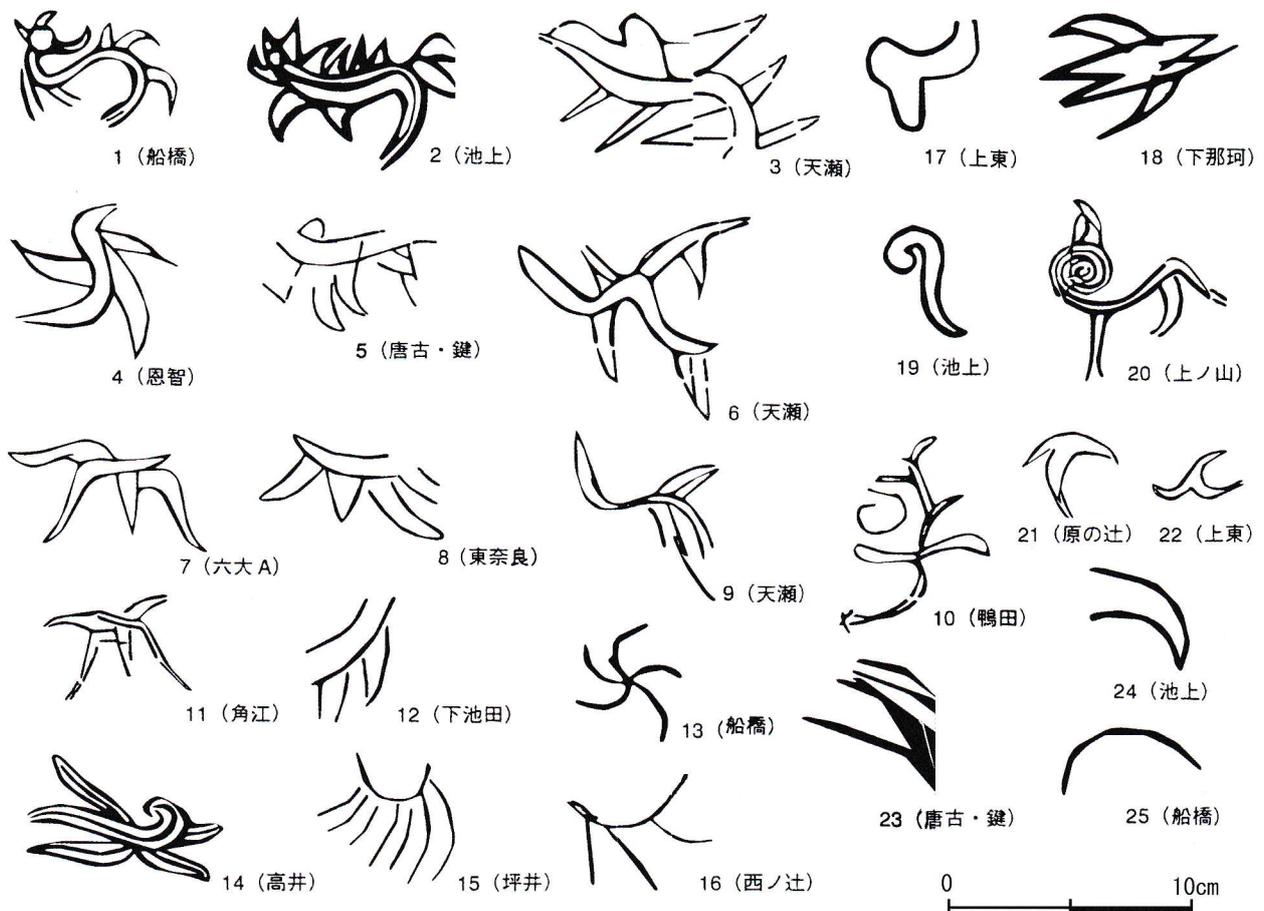


図14 龍の図像集成（岩本2002に一部追記）

6. まとめ

ここまで、南講武草田遺跡出土の外来系土器と「龍」の絵画土器に関する検討を行ってきた。さいごに、「龍」が描かれた絵画土器の出現背景を考えたい。

講武盆地は古浦遺跡や堀部第一遺跡をはじめ、弥生時代前期から古墳時代まで様々な地域との関わりのなかで、弥生文化を形成してきた。そうしたなかで、南講武草田遺跡は、調査当初から近畿系土器が目立つ遺跡として認知されていた。今回、南講武草田遺跡から出土した外来系土器の分析を行い、製作技法を読み解くなかで、北丹波や但馬といった地域を媒介として、近畿南部の影響を強く受けて成立した可能性を示した。また、近畿南部に限らず、丹後や加賀などの日本海沿岸地域からの影響もわずかながら垣間見ることができ、広く人々が訪れた集落であったことを改めて検証することができた。そして、こうした広域的な交流を支えた道具として、小型甕形土器は他地域から旅をしてきた人々が持ち運んだ大事な旅道具であったのかも知れない。

「龍」の絵画は、近畿南部などをその源流として、各地に広がっていくことは明らかである（岩本2002）。南講武草田遺跡の「龍」の絵画土器は、前述した近畿南部を主としつつ、北丹波や但馬の流れを受けて出現した可能性が高く、そのなかで「龍」の絵画の拡散と連動して出現したものと思われる。一方で、「龍」が持つ意味は、水との関係を示すと言われる（春成2000）。講武盆地においては、水田との関わりが強いと考えられるが、ここまで議論することはできなかった。また、山陰地方に展開する様々な弥生文化との関係についても、十分に言及できていない。今後、山陰の弥生文化との関わりを踏まえつつ、「龍」の絵画土器が用いられた意味を考えていきたい。

謝辞

本稿を草するにあたり、松江市埋蔵文化財調査課、松江市立鹿島歴史民俗資料館、吉松優希氏、今福拓哉氏、西村航希氏、前田詞子氏には様々なご配慮・ご教示を受けた。特に、赤澤秀則氏には南講武草田遺跡及び講武盆地のこれまでの調査から最新の知見まで多岐にわたりご教示を受けた。ここに、深く感謝申し上げます。

なお、本研究は、JSPS科研費JP23K12306、JP23H00021、JP24H02191の助成を受けたものです。

註

- 註1 赤澤氏からご教示頂いた。
- 註2 発掘調査報告書においては「畿内系」とされるが、実際に類似する個体は畿内には存在しないとの見解が多い。
- 註3 有段口縁とも称される場合があるが、本稿では複合口縁とした。

参考・引用文献

- 青木元邦 1994 「く」の字状口縁甕の成形・調整法『長泉寺遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財センター
- 赤澤秀則 1992 「IV. 小結」『南講武草田遺跡 講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5』鹿島町教育委員会
- 東 和幸 2006 「南九州地域の龍」『原始絵画の研究』六一書房
- 安藤広道 2006 「弥生時代「絵画」の構造」『原始絵画の研究』六一書房
- 池淵俊一 2022 「弥生・古墳時代の日本海交流と出雲－出雲平野と鹿島地域を中心に－」鹿島歴史民俗資料館2022年度特別展関連講座資料
- 岩本 貴 2002 「角江遺跡出土の絵画土器2－竜の絵画を中心に－」『考古学論文集 東海の路－平野五郎先生還暦記念－』『東海の路』刊行会
- 会下和宏・高安克己 2020 「後期旧石器時代から弥生時代における宍道湖・中海周辺地域の遺跡分布と変遷」『島根大学研究・学術情報機構 総合博物館年報 平成29・30・31（令和元）年度』
- 鹿島町教育委員会 1987 『佐太前遺跡』
- 鹿島町教育委員会編 1989 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書4 北講武氏元遺跡』

- 鹿島町教育委員会 1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』
- 鹿島町教育委員会 1994『下谷遺跡・稗田遺跡』
- 鹿島町教育委員会 2005『掘部第1遺跡』
- 桐井理揮 2020「擬凹線土器様式の解体-浅後谷南式の再検討-」『京都府埋蔵文化財情報』第138号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985『青野西遺跡』京都府遺跡調査報告書4
- 黒坪一樹・石崎善久・福島孝行 2000「浅後谷南遺跡」『京都府遺跡調査概報』第93冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 佐原 真 1980「弥生土器の絵画」『考古学雑誌』第66巻第1号、日本考古学会
- 設楽博巳 2006「日本原始絵画研究の歴史と課題」『原始絵画の研究』六一書房
- 鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター編 2005『山持遺跡vol.1』
- 高野陽子 2006「丹後地域」『古式土師器の年代学』大阪府埋蔵文化財センター
- 高野陽子 2007「タニハの土器をめぐる交流」ふたかみ邪馬台国シンポジウム7『邪馬台国時代の丹波・丹後・但馬と大和』香芝市二上山博物館
- 高野陽子 2009「弥生後期土器の地域色とその系統」『京都府埋蔵文化財情報』第108号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 多賀茂治 2000「兵庫丹波における庄内式並行期の土器の様相」『庄内式土器研究XXII』庄内式土器研究会
- 滝沢規朗 2005「越語・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」の字甕について」『三面川流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 谷本 進 2001「但馬における庄内式併行期の土器の様相」『庄内式土器研究』22 庄内式土器研究会
- 近澤豊明 2000「北丹波における庄内併行期のタタキ甕について-丹後系土器様式の変と崩壊-」『庄内式土器研究』22 庄内式土器研究会
- 都出比呂志 1983「弥生土器における地域色の性格」『信濃』第35巻第4号 信濃史学会
- 坪田聡子 2000「若狭・越前における丹後系土器の様相」『庄内式土器研究』22 庄内式土器研究会
- 豊岡市教育委員会 1987『北浦古墳群・立石古墳群』豊岡中核工業団地予定地内埋蔵文化財発掘報告3
- 豊岡卓之 2003「清水風遺跡の土器絵画小考」『考古学論攷：檀原考古学研究所紀要』第26冊
- 鳥取県教育文化財団 2001『青谷上寺地遺跡』3
- 中川 寧 2006「山陰地域」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター
- 松下 勝・岡田章一 1981『丹波・口阪本遺跡』西紀町・丹南町教育委員会
- 松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様相と編年 山陽・山陰』木耳社
- 森岡秀人・西村 歩編 2006『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター
- 橋本裕行 1996「弥生時代の絵画」『弥生人の鳥獸戯画』雄山閣出版
- 橋本裕行 2020「弥生絵画集成-中国・四国編-」『考古学論攷』第43号奈良県立檀原考古学研究所
- 林巳奈夫 1993『龍の話』中央公論社
- 東森 晋 2023「山陰の弥生時代絵画の地域性」『鳥根考古学会誌 第40集 鳥根考古学会創立40周年記念特集号』鳥根県考古学会
- 春成秀爾 1991「絵画から記号へ-弥生時代における農耕儀礼の盛衰-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集
- 春成秀爾 2000「変幻する龍-弥生土器・銅鏡・古墳の絵-」『絵画』（「ものがたり日本列島に生きた人たち」5）、岩波書店
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター編 2011『中角遺跡4 II・Ⅲ区下層編』福井県埋蔵文化財調査報告第117集
- 藤田三郎 1982「弥生時代の記号文」『考古学と古代史』同志社大学考古学研究室
- 真木大空 2024「集落動態と交易からみた出雲の弥生社会」『荒神谷発見！-出雲の弥生文化-』鳥根県立古代出雲歴史博物館
- 安中哲徳・中江隆英 2024「北陸南西部の様相」『東日本における土器からみた古墳社会の成立』東日本古墳確立期土器検討会
- 八鹿町教育委員会 1987『箕谷古墳群：発掘調査報告・戊辰年銘太刀修理報告』兵庫県八鹿町文化財調査報告書6
- 山田康弘 2006「山陰地方の弥生絵画」『原始絵画の研究』六一書房